

# 哲学者の証し

— 渡邊二郎教授のこと —

田中 敦

東京大学名誉教授の渡邊二郎氏が去る2月12日に逝去された。それを知ったのは、前日に熱を出し、家で臥っていた14日の夕刊によってであった。学会などで話をさせて頂くことはあったにせよ、渡邊教授とは師弟関係にはなく、追悼文を書く立場でないことは承知している。しかし、私はその訃報に接して、一人の実存者からの無言の重い教えを、いや問いを与えられたように感じたのである。

渡邊教授と個人的に初めて言葉を交わしたのは、確かある学会誌に論文を投稿し、編集委員会で不採用とされた直後のことだった。編集委員長をしておられた方から届いた懇切な説明の手紙に到底承服し難く、お礼と共にかなり激しい論調で反論を書いた覚えがある。暫く後、その学会会場ですれ違ったとき、思いがけず渡邊教授から声を掛けられた。「できるだけ色々な論文を掲載できるようにしたいのですが」と励ましの口調で話しかけられた。更に驚いたことに、翌年正月には年賀状を頂き、慌てて返礼を書いたことを記憶している。それ以来年賀状をお出しし、また頂くようになった。

躊躇を覚えつつ満足できない論考を先生にお送りした際でも、必ずお読み下さり、要点を突いた問題点の指摘と感想を書いてくださった。同僚や学会関係者、教え子達から、数え切れない論文や書物が送られてくるはずであるから、私にまで丁寧に返事を下さることは、信じ難いことであった。著書として出版したヘーゲルに関する博士論文を渡邊教授に送ったところ、詳しい批評と共に激励の言葉を頂いたと感激の面持ちで話をされたある国立大学の教授の言葉も思い出される。もちろん渡邊教授の直接の弟子ではない方である。

渡邊教授は、研究発表で曖昧な言葉遣いや論理の飛躍などがあれば、鋭く的確な指摘をされ、学問研究に対する真摯で厳格な態度を示された。私自

身、日本現象学会での発表の際、引用資料に用いた「A, B, C…」という記号と、引用文中の「Wie」を何度も発語したため、「B」か「Wie」なのか聞いていて解らない、と厳しく指摘されたことがある。聞き手にとって解りやすい言葉遣いのことまで渡邊教授は常に心がけられていたのだと思う。しかし、学者らしい凛とした姿勢からは伺えない、気さくで囚われない談話を楽しまれる一面を垣間見たこともある。ある研究会のあと、一緒に行きませんかとお誘いを受け、確か渡邊教授、桑木務教授、川原栄峰教授そして国際基督教大学の院生だった五郎丸仁美氏と5人で飯田橋近くの小料理屋に入ったことがあった。そこにはドイツ人の客がいて、ドイツ語での気楽な世間話を心から楽しんでおられた。

私が信仰と学問の面で指導頂いた立教大学名誉教授の故中澤宣夫氏から何度かお聞きした話がある。東京大学の哲学会でのことらしいが、当時の齋藤忍随教授がここにいる人の中でハイデッガーを一番理解しているのは井上忠氏だろう、と言われたというのである。もちろんそこには若い渡邊教授もおられ、多少不服そうに、しかしいかにも渡邊教授らしく、「ええ、きっとそうでしょうね」というように発言されたらしい。その場の具体的な様子を知る由もないが、中澤氏が話された様子からも、そして齋藤教授が渡邊教授を高く評価しておられたということからも、微笑ましい師弟間の、また信頼に基づいた先輩後輩の競い合いの関係を私はそこに感じた<sup>1</sup>。そこに私は、現在の「大学大綱化」「大学改革」の大合唱に踊らされ、なくてはならないものを放り出し、数量化によって直ぐに目に見える成果を生み出そうと躍起になっている大学と大学人が見失ってしまった美しいものの残照を感じる思いがするのである。

また私が属している「京都ヘーゲル讀書會」でも二度講演をして下さっ

---

1 日本哲学会の場で二人のやり取りに私自身も立ち会ったことがある。私の印象では、二人はそれぞれにハイデッガーの問題提起が含んでいる二つの面を自らの問題にしておられるように思われる。特定の分野や傾向に限定されない問いの広さ、普遍性の側面（渡邊教授）と、ある種の根源的経験、事象との根本的出会い（イデアイ）の面（井上教授）である。しかし、存在の問いの根柢をなすと私には思われる学問論とその歴史性の問題は、表立って取り上げられていないように思われる。

た。一度は歴史の現代をハイデッガーとヤスパースの技術論の対比で論じられ、二度目は分析哲学による実存哲学批判に対する反批判を存在の理解に絞って論じられた。特に後者は、趣旨としては『理想』誌上で既に展開されていたものであるが、架橋しがたい立場の違いを超えた本格的な対話と積極的批判で、恐らく今日渡邊教授だけがよく為しえる 建設的対話の試みであろうと感じた。京都ヘーゲル讀書會の酒井修教授が、今日哲学者がきちんと論ずべきこの問題点を「良くぞ言ってくださった」と絶賛されたものである。

渡邊教授に講演をお願いした際、京都ヘーゲル讀書會の趣旨を、出身大学の違いを超えて、真面目に哲学の地道な学びを続けることにあるとお伝えしたが、そのような精神は実は渡邊教授ご自身が私に示してくださったものであった。渡邊教授はこの会の精神を喜ばれ、懇親会の席で、講演者としてでなく、一メンバーとしても参加したいと発言された。実際は御多忙のため、二度の講演をお願いしただけであったが、この先生の言葉は真実のものであったと思っている。

『存在と時間』における現象の厳密な意味について、ある小さな研究会で質問させて頂いたことがある。そのとき渡邊教授は私の理解を否定して、自分はそう考えないと明瞭に反論された。昨年二月、この点の私の理解を含む小論がブタペストから出ている *Existentia* 誌に掲載されたので、抜き刷を渡邊教授にお送りしたが、それに対する返事は頂かなかった。お年のせいで、今までのようなお返事は困難なのだろうと私は思っていた。今年差し上げた年賀状に対しては印刷された年賀状を頂いた。いつも何か書き添えておられるのに、やはりお年のせいかと思っていた。ところが驚いたことに、それから一週間ほどあと、恐らく1月20日ごろであろうか、手書きの葉書を頂いた。渡邊先生の字であったが、随分震えている。そこには、昨年の *Existentia* の拙論に対して返事できなかったことを詫び、「ちょうど昨年の一、二月頃には、もう駄目かと言われておりました。それが、神の加護あってのことか、本年の正月を迎えられるほどには、どうやら持ちこたえたようです」と書かれていた。続けて葉書の表面の端に、「私のことは御放念、御休心下さい。目下入院中の病棟の窓辺には朝日が輝いております。先生の本年の御多

幸、御活躍を心から祈念申し上げます。草々」とその葉書は結ばれていた。この言葉を読んだ時、私は胸を衝かれる思いがした。ハイデッガーを研究する一介の後輩にここまでお書き下さるとは。どれほど多くの知人、教え子達と真摯な文通をされたかを思うと、これは私にとっては謎に近いものであった。朝日の輝きで何を言おうとされたのか。自然の不易に対する人間の小ささであろうか、あるいは哲学の伝統の微かな残照が朝日の輝きに転ずることへの希望であろうか。

私自身は、先生のご病状を知る由もなく、『『ただ辛うじて神の如き存在が我々を救うことができる』。この思索と認識の無力を告白するようなハイデッガーの言葉に、ソクラテスの無知の知にも匹敵する、徹底した批判の言葉を見出す思いのすることの多い昨今です。皆様の御多幸をお祈り申し上げます」と印刷した年賀状に近況を書き添えてお出ししたのである。恐らく先生はその賀状をお読み下さったのではないだろうか。それで「新しい年を迎え、大きな抱負を胸裡に抱いて、来るべきこの一年を思い描いていらっしやる正月休みと拝察いたします。」とお書き下さったのであろう。

立っていること自体困難であった晩年のカントが、訪問客が着席するまで座ろうとせず、「人間性に対する尊敬の感情はまだ私を見捨てていなかった」と後に述懐したことを我々は知っている。しかし、そうした誠実な生き方が自らの実存の事実的な可能性であることを我々は自らに問うているであろうか。渡邊教授は無言の内にその姿勢を示されたのだと私は改めて感じた。そしてこのことは私一人が受取っていてよいことではなく、哲学者の証しとして学問に、哲学に関心を持つ人々にもお伝えする義務があるように感じられたのである。今こうして、殆ど編集が終った「紀要」に、無理をいって場所を設けて頂いたが、それは哲学の荒野に、「廃墟の中の大学」<sup>2</sup>において、なお哲学を生きることはどういうことかと問いかける実存を確認し、朝日の輝きへの想いを書き残すことが責務だと思われるからである。

2 この言葉は2008年3月20日に開催された「ICU哲学研究会」のシンポジウムで、大阪大学の望月太郎教授が取り上げられたものである。